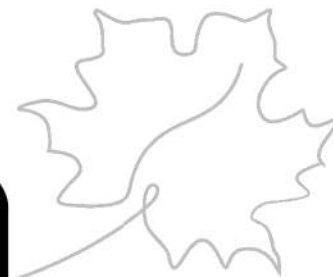


NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2026/2027シーズン



2026/2027 シーズン

新日本フィルハーモニー交響楽団 10、11月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #673 相場ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #43 小室敬幸	7
すみだクラシックへの扉 #44 石川亮子	13
楽員ストーリーズ 58 丹羽紗絵 (ヴァイオリン)	19
NJP from Inside	20
2026 / 2027 シーズン 定期演奏会プログラム	23
NJP 1月、2月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	24
お客様からの声	27
室内楽シリーズ	30
音のアトリエ	31
寄稿「音楽が作り上げられる瞬間 ～リハーサル現場の面白さ」 林 昌英	33
「バトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2026-2027 Season
#673

10.17 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第673回定期演奏会
2026年10月17日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

10.18 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第673回定期演奏会
2026年10月18日(日) 14時00分
サントリーホール

●ムストネン (1967-)

トリプティーク

Olli Mustonen: Triptych

- I. Misterioso
- II. Furioso
- III. Ad astra

約10分

●ベートーヴェン (1770-1827)

ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 op. 73 「皇帝」

Ludvig van Beethoven: Piano Concerto No. 5 in E-flat major, op. 73

- I. Allegro
- II. Adagio un poco moto
- III. Rondo: Allegro, ma non troppo

約40分

—— 休憩20分 ——

●メンデルスゾーン (1809-47)

交響曲第3番 イ短調 op. 56 「スコットランド」

Felix Mendelssohn Bartholdy: Symphony No. 3 in A minor, op. 56

- I. Andante con moto – Allegro un poco agitato
- II. Vivace non troppo
- III. Adagio
- IV. Allegro vivacissimo – Allegro maestoso assai

約40分

〔指揮・ピアノ〕オリ・ムストネン

Olli Mustonen, Conductor, Piano

〔コンサートマスター〕西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）[10/17公演]
- 特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人 オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人 日本芸術文化振興会
公益財団法人アフィニス文化財団
- 後援：フィンランド大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



Embassy of Finland
Tokyo

Profile



©Laura Malmivaara

オリ・ムストネン [指揮・ピアノ・作曲]
Olli Mustonen, Conductor / Piano / Composer

ラフマニノフ、ブゾーニ、エネスクといった偉大な作曲家の伝統を受け継ぎ、作曲家、ピアニスト、指揮者として一人三役での公演も行うなど並外れた才能を持つ、今日の音楽界において特異な存在である。これまでに、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ニューヨーク・フィルハーモニック、ロサンゼルス・フィルハーモニック、シカゴ交響楽団、クリーヴランド管弦楽団、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、マリンスキー劇場管弦楽団、パリ管弦楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団など、世界の主要オーケストラと共演している。母国フィンランドでは、2021～23年トゥルク・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督および首席指揮者、23年よりラップランド室内管弦楽団首席客演指揮者を務めるほか、フィンランド放送交響楽団、ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団、ユヴァスキュラ交響楽団をはじめとするオーケストラと多数共演しており、ダリア・スタセフスカ指揮ラハティ交響楽団とは、『ラウタヴァーラ、マルティヌー：ピアノ協奏曲第3番』のCDがBISレーベルからリリースされている。作曲の分野では、19年に名誉あるヒンデミット賞を授与された。近年は、「Taivaanvalot (天空の光)」をイアン・ポストリッジ&スティーヴン・イッサーリスとアムステルダム・ミュージックヘボウ・アアン・ヘット・アイで初演、その後ウィグモアホールと香港でも公演を行った。24年12月6日(フィンランドの独立記念日)には、エリナ・ヴァハラ・ヴァイオリンとニコラス・コロソ指揮フィンランド放送交響楽団により、自身のヴァイオリン協奏曲がフィンランドで世界初演されている。

チェロのスティーヴン・イッサーリスとは30年以上にわたり共演を続けている。ヘルシンキ生まれ。5歳よりピアノ、ハーブシコード、作曲を学ぶ。最初にラルフ・ゴトローニに、その後ピアノをエーロ・ヘイノネンに、作曲をエイノユハニ・ラウタヴァーラに師事した。

Program Notes ●相場ひろ [音楽評論]

近年の研究によって大きくイメージが変わったクラシックの作曲家のひとりに、フェリックス・メンデルスゾーンがいる。ユダヤ人の作曲家として貶められたこの作曲家については、演奏はおろか研究すらままならない時代が長く続いた。第二次大戦後、そうした制約から解放された研究家たちは、散逸の危機にあった資料を集め、整理し、解読して、彼の真の姿に迫ろうとし続けている。例えば、メンデルスゾーンと言えど若い頃は神童で、長じて後も天才肌で、渾々と泉が湧き出るかのように心に浮かぶままに音楽を楽譜に書きとめていたイメージが根強くあるように思うけれども、実際にはひとつの曲を完成させるために粘り強く推敲を重ね、いくども改訂した末にようやく楽譜を確定させるという努力の人であった。「宗教改革」の名で知られる交響曲第5番は、彼の厳しい自己批判のために生前出版されなかったし、「イタリア」と呼ばれる交響曲第4番は、改作を始めたものの完成に至らず、やはり生前には出版の機会を失ってしまった。交響曲第3番「スコットランド」はメンデルスゾーン自身が最終形を確定させて後世に遺したとはいえ、そこに至る道程で大胆な改変や省略・増補が行われていたのである。音楽の神に祝福されていたとしか思えない、八面六臂の活躍で19世紀前半のドイツ音楽を大きく牽引したメンデルスゾーンですら、思うがままにすらすらと音楽を生み出すことができなかったことを思うとき、芸術というものの難しさ、そしてそれを後世が語ることの難しさと、ふたつの難しさに思いを馳せずにはいられない。

■ ムストネン：トリプティーク

作曲家としての顔▶ オリ・ムストネン(1967年生)は、ピアニストとして1984年にジュネーヴで開かれた青少年のためのピアノ・コンクールで2位を獲得し、国際的に知られるようになった。しかしその活動はピアノにとどまらず、こんにちでは指揮者として、また作曲家として活躍している。

作曲の経緯▶ 「トリプティーク(三部作)」は2014年、アメリカの物理学者サム・ステッペルの委嘱によって、彼の亡き妻への追悼として書かれた。当初はチェロ3人のための楽曲であったが、2015年にムストネン自身によって弦楽合奏のために編曲された。タイトル通りに3楽章構成をとり、第1楽章は「ミステリオース(神秘的に)」、第2楽章は「フリオーソ(激し

く)、第3楽章は「アド・アストラ(星々へ)」と題されている。「アド・アストラ」は「苦難を乗り越えて星々(高み・栄光)へ」を意味するラテン語の成句「ペル・アスペラ、アド・アストラ」に由来する。

[楽器編成]弦楽5部。

■ ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 op. 73「皇帝」

1808年12月22日、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の交響曲第5番、第6番、ピアノ協奏曲第4番と「合唱幻想曲」を一挙に初演するという記念碑的な演奏会が開かれる。このとき既に、第4番に続く新作ピアノ協奏曲の構想は始まっていたようで、「合唱幻想曲」のためのスケッチ帳の末尾に、いくつかの主題のスケッチが書き留められている。翌年はフランス軍のウィーン侵攻によって身の回りが騒がしくなったものの、ベートーヴェンは精力的に協奏曲を書き進めており、1810年2月4日には出版社に完成の報告を送っている。初演は1811年11月28日にライプツィヒで行われ、既に聴力を大きく失っていたベートーヴェンに代わってフリードリヒ・シュナイダーが独奏を務めた。「皇帝」というニックネームはベートーヴェン自身の命名ではなく、出版に際して付されたものである。

第1楽章 アレグロ。管弦楽の奏する和音を合図に、ピアノ独奏が主部からは独立したカデンツァ風の動きを繰り広げて壮麗に開始される。主部はスケール大きく、堂々としたたずまいの協奏ソナタ形式で書かれている。カデンツァは作曲者自身が記譜しており、コーダのうちに短くまとめて置かれ、独奏と管弦楽の一体性が際立たせられている。

第2楽章 アダージョ・ウン・ポコ・モート。穏やかな雰囲気を満たされた緩徐楽章は三部形式をとる。冒頭の主部が中間部を経て回帰した後、ピアノ独奏が第3楽章の主題を予告する。

第3楽章 ロンド：アレグロ、マ・ノン・トロppo。第2楽章から切れ目なく続けられる終楽章はソナタ・ロンド形式であり、中間部が第1主題による展開部となっている。力強い音楽はコーダでいったん沈静を垣間見せた後、短く高揚して全曲を閉じる。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

▶ スコットランド滞在を
もとに

■ メンデルスゾーン：交響曲第3番イ短調 op. 56「スコットランド」

フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)は1829年4月より英国に長期滞在して、ロンドンで自作の演奏会を成功させるなど、実りの多い日々を過ごした。エディンバラなどスコットランド各地を初めて訪れたのは同年7月のことである。風光明媚な自然や古城などに深い感銘を受けた彼は、その印象を基に「スコットランド」のタイトルで親しまれている交響曲第3番イ短調 op. 56を書き上げる。ただしこの作曲は難航した。スコットランド訪問時に彼は、ベルリンに住む家族にあてて「スコットランド交響曲の始まりを見つけました」とスケッチを書き送った。しかしながらその後ほとんど進展がなく、1831年にはいったん作曲を中断してしまう。ようやく完成したのは1842年1月のことで、その後改訂を経て、1842年3月3日、ライプツィヒで初演された。しかしその後も改訂が続く、こんにち知られる楽譜が完成したのは、翌年1月26日にライプツィヒで再演されたときであった。

なお、メンデルスゾーン自身は初演・出版に際して「スコットランド」の副題を用いず、単に「交響曲第3番」と名付けた。またこの作品は、作曲者の生前に完成・出版された最後の交響曲でもある。全4楽章からなり、全曲は切れ目なく演奏される。

第1楽章 アンダンテ・コン・モート～アレグロ・ウン・ポコ・アジタート。長大な序奏はメランコリックな雰囲気の色濃く打ち出す。主部はソナタ形式であり、序奏の気分を反映した陰影の濃い音楽が繰り上げられる。

第2楽章 ヴィヴァーチェ・ノン・トロppo。スケルツォ楽章にあたり、ソナタ・ロンド形式とされる。冒頭でクラリネットが提示する主要主題は、第1楽章の序奏に由来すると共に、スコットランド民謡の特徴的な付点リズムやバグパイプの音色の模倣を目指しているとも言われる。

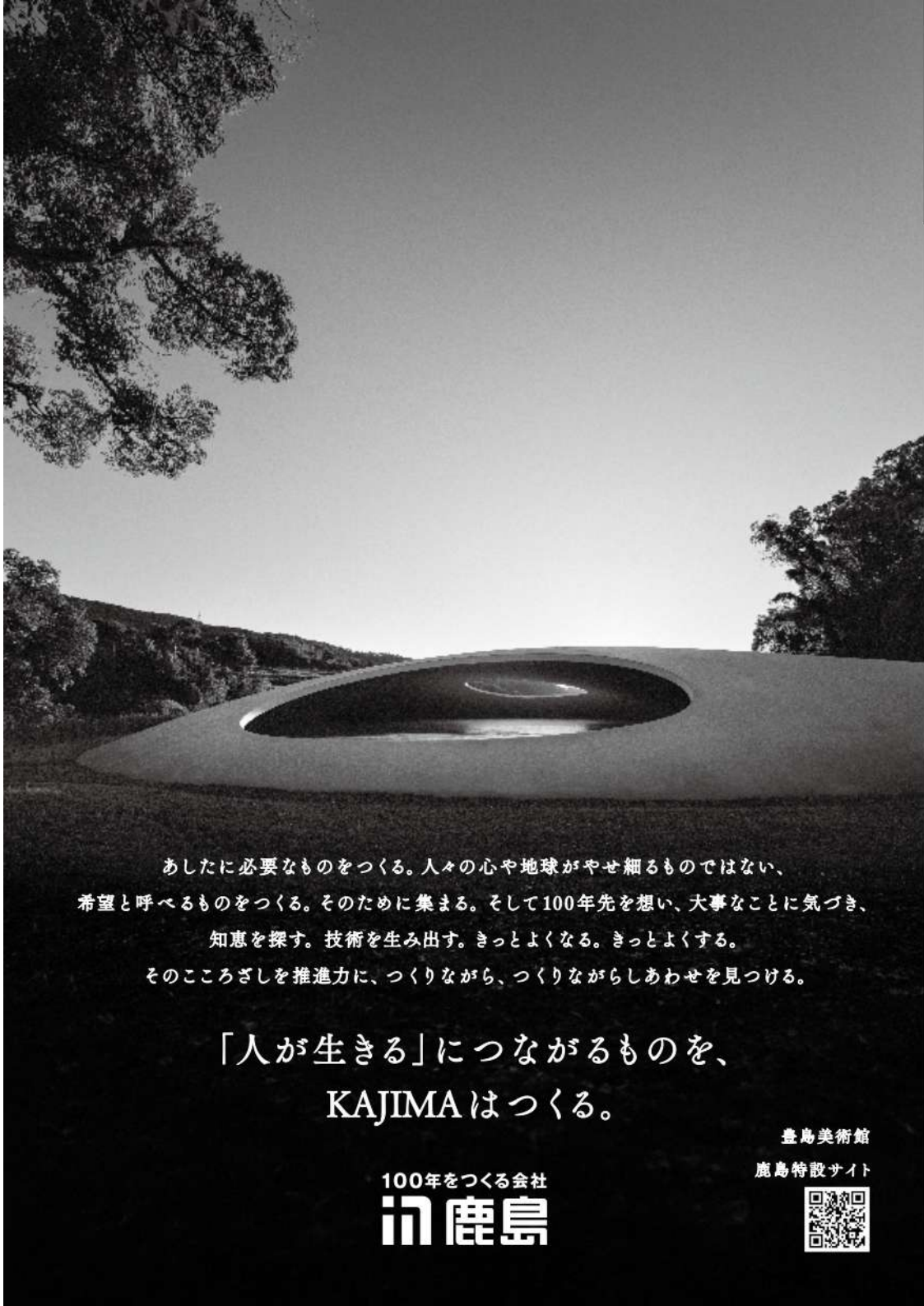
第3楽章 アダージョ。弦主導の壮麗な長調の音楽と、管楽器・打楽器が際立つ短調で葬送行進曲風のリズムの音楽とが交互にあられる。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチッシモ。情熱的でアグレッシヴな音楽がソナタ形式の枠組みの中で繰り上げられる。コーダでは第1楽章冒頭の気分を回想した後に晴朗で力強い音楽があらわれ、ドラマチックに全曲を閉じる。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

▶ 曲の構成と
音楽の特徴

▶ 曲の構成と
音楽の特徴



あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくする。
そのころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

100年をつくる会社
in 鹿島

豊島美術館
鹿島特設サイト



TOBIRA of classic
SUMIDA #43
OMIYA #01
2026-2027 Season

10.23 [金] 24 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会

すみだクラシックへの扉 第43回

2026年10月23日(金) 14時00分

10月24日(土) 14時00分

すみだトリフォニーホール

10.25 [日]

クラシックへの扉 大宮公演

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会

クラシックへの扉 大宮公演 Vol.1

2026年10月25日(日) 14時00分

RaiBoC Hall (市民会館おみや)

●ワーグナー (1813-83) / マゼール編曲

Richard Wagner / Lorin Maazel

〈ドイツ〉

言葉のない「指環」～『ニーベルングの指環』管弦楽曲集

約70分

Der Ring ohne Worte

楽劇『ラインの黄金』より

Das Rheingold, excerpts

第1場への前奏曲、第2場、第3場、第4場

楽劇『ワルキューレ』より

Die Walküre, excerpts

第1幕：前奏曲と第1場、第3場

第2幕：前奏曲と第1場、第2場

第3幕：第1場「ワルキューレの騎行」、第2場、第3場

楽劇『ジークフリート』より

Siegfried, excerpts

第1幕：第2場、第3場

第2幕：第2場、「森のささやき」「ジークフリートの戦い」

楽劇『神々の黄昏』より

Götterdämmerung, excerpts

序幕「夜明け」

第2部：第3場

第3幕：前奏曲と第1場、第2場、「葬送行進曲」、第3場

※本公演は休憩がありません。

[指揮] 上岡敏之

Toshiyuki Kamioka, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール(公益財団法人 墨田区文化振興財団) [10/23、24公演]
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援：ドイツ連邦共和国大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



ドイツ連邦共和国大使館
東京

Profile



©武蔵野

上岡敏之 [指揮] Toshiyuki Kamioka, Conductor

東京生まれ。東京藝術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。1982年、名誉ある安宅賞を受賞。後にロータリー国際奨学生として、ハンブルク音楽大学に留学、クラウスペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレペティートル及びカベルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。

これまでに、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者等を歴任。2004年からヴッパータール市立歌劇場音楽総監督に就任。その後、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントの要職を務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、絶賛を博した。16/17シーズンよりコペンハーゲン・フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者に就任。ケルン放送交響楽団、バンベルク交響楽団、バイエルン放送交響楽団、シュトゥットガルト放送交響楽団などに客演する。

日本では、これまでに、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、九州交響楽団などに客演し、16年シーズンから5年間にわたり新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督を務めた。

欧州を中心に活躍し、オペラ、コンサートの両面において、高い音楽性、きめ細かい解釈、そしてオーケストラの個性を引き出す力が、国際的に高く評価されている。

2002年ホテルオークラ音楽賞、2007年第15回渡邊暁雄音楽基金音楽賞、2014年第13回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。

ヴッパータール響とのコンビでは、コロムビアとオクタヴィアより8枚のCDをリリースし、いずれも高い評価を得る。新日本フィル音楽監督在任中はライブ録音も継続的にリリースし、好評を博す。

現在、コペンハーゲン・フィル名誉指揮者、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

映画『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズ(2001~03)の原作になったのが、英国の作家J・R・R・トールキン(1892~1973)の小説『指輪物語』だ。言語学者で、古代中世文学の研究者だったトールキンは、自らの『指輪物語』とワーグナーの『ニーベルングの指環』の類似を指摘された際、「どちらの指輪も丸かった。それで類似は終わりだ」と反論している。だが実際のところ、世界支配の力をひとつの指輪に象徴させ、それを長大な物語全体の中心に据えるという発想はワーグナーが生んだものであり、それを知ったうえで『指輪物語』が執筆されたのは間違いのないようだ。

ワーグナー：舞台祝祭劇『ニーベルングの指環』について

『指環』の草稿 ▶

ザクセン王国宮廷楽長の地位にあったリヒャルト・ワーグナー(1813~83)は、『ニーベルング神話 — 劇のための草案』という構想を1848年10月に記し、翌11月には『ジークフリートの死』(現在の『神々の黄昏』)という台本を完成させている。この時点での物語は、死んだジークフリートを妻ブリュンヒルデが神々の城ヴァルハラに連れていくことで神々の罪が償われ、神々の長ヴォータン(ブリュンヒルデにとっては父)による世界の支配が改めて確立される……という現在とは真逆の結末だった。

革命への関与を経て ▶

その翌年にワーグナーは、ウィーン体制の崩壊の前触れとなるヨーロッパ各地で生じた「諸国民の春」や「1848年革命」等と呼ばれる暴動や戦争のひとつ、1849年の「ドレスデン五月蜂起」に参加する。残念ながら革命は制圧され、ワーグナーは定職を失うだけでなく、逮捕状を出されてしまう。フランツ・リストの助けで国外脱出して、最終的にはスイスのチューリッヒに落ち着いたが、10年以上にわたってドイツ連邦に帰国できなくなってしまった。この経験が『ニーベルングの指環』の構想を大きく変化させていく。

ブリュンヒルデによる
成就 ▶

1851年に『若きジークフリート』(現在の『ジークフリート』)、1851~52年に『ワルキューレ』『ラインの黄金』と、物語の時系列をさかのぼって台本が追加執筆された。その上で1852年11~12月に前述した『ジークフリートの死』の内容が大きく改訂され、ジークフリートが死んだことで、妻ブリュンヒルデはヴァルハラ城に火を放ち、神々の世界(君主制の象徴)が滅んでしまうという結末になった。

つまり実世界では失敗してしまった革命を、作品上で成就させているのだ。もともとは神であったブリュンヒルデが革命を実現させるという選択も、ワーグナーが元体制側(宮廷作曲家)だったことを思えば興味深い。

1874年にやっと全てが完成し、初めて開催されたパイロイト音楽祭において1876年8月13～17日にかけて4部作がまとめて上演された。

■ ワーグナー（マゼール編曲）：

言葉のない「指環」～「ニーベルングの指環」管弦楽曲集

マゼールによる▶
管弦楽版

8歳でニューヨーク・フィルを振って指揮者デビューするほどの神童だったロリン・マゼール（1930～2014）は、ヴァイオリニストや作曲家としての顔も持っていた。作曲家としての能力が発揮されたのが、米国の音楽レーベル「テラーク」の企画でつくられた『言葉のない指環（Der Ring ohne Worte／The Ring without words）』である。1987年12月にベルリン・フィルによって初録音され、1990年5月にはピッツバーグ響によって演奏会でも初演された。

休憩無しでも約15時間の上演時間を要する『ニーベルングの指環』を2時間の演奏会で取り上げる場合、演奏しやすく抜粋された管弦楽曲を何曲か並べるのが一般的だ。それに対してマゼールは、物語順に沿って抜粋された約70分の音楽を再構成。一部で歌のパートを楽器に割り当てたりこそしているが、ワーグナーの書いた音だけを利用して、切れ目なく演奏できるようにまとめたのが『言葉のない指環』なのである。ここからは各作品の位置づけと、抜粋された箇所がどのような場面なのかを解説していこう。

ラインの黄金より▶

序夜『ラインの黄金』（原曲は約2時間半）は、英雄ジークフリートが死ぬ遠因となった「指環」の恐ろしさと、弱者の象徴アルベリヒ（小人で地底に棲むニーベルング族）と世界を支配せんとするヴォータン（神々の頂点）の因縁が描かれる。指環の原材料である黄金が眠るライン川が、音楽によって生成されていく第1場への前奏曲、巨人族が完成させた神々の城ヴァルハラ（ワグネル）の荘厳さが伝わってくる第2場、巨人族へ支払う報酬として必要な指環をアルベリヒから奪うべく、ヴォータンが地下の世界にむかうと、鍛冶を生業とするニーベルング族が集団で金床を打っている第3場と続き、第4場の雷神ドンナーが槌を振るって雷雨を起こす場面が『ワルキューレ』冒頭の嵐へと接合される。

ワルキューレより▶

第1夜『ワルキューレ』（原曲は約4時間）は、ジークフリートの両親（ヴォータンを父、人間を母にして生まれた双子：ジークムントとジークリンデ）の悲しい運命の物語。次作でジークフリートと結ばれるブリュンヒルデ

（ヴォータンが父、知恵の女神エルダが母で、ヴァルキューレたちの長女）の背景も描かれる。嵐のなかを命からがら逃げてきたジークムントが、ジークリンデの家にたどり着き、話すうちに惹かれ合う第1幕：前奏曲と第1場、2人は生き別れの兄妹であるを知り、それでも愛し合ってしまう第1幕：第3場、2人の逃避行を描いた第2幕：前奏曲と第1場と続くが、音楽はジークムントが死んでしまったこの幕の後半に飛び、命令に逆らったブリュンヒルデに対してヴォータンは激怒する。第3幕：第1場は「ワルキューレの騎行」で、戦死した英雄たちをヴァルハラ城へ運ぶヴァルキューレたちが空を駆けめぐる。第3幕：第3場は「ヴォータンの告別と魔の炎の音楽」で、ヴォータンが娘ブリュンヒルデを岩山に眠らせ、魔法の炎で包みこむ。

ジークフリートより▶

第2夜『ジークフリート』（原曲は約4時間）は、ジークムントとジークリンデの息子であるジークフリートが英雄となり、ブリュンヒルデと結ばれるまでが描かれる。父ジークムントの遺した剣ノットゥングをいつまでも直せない養父ミーメにしびれを切らしたジークフリートが、自ら剣を鍛え直すことに成功するのが第1幕：第2場～第3場で、第2幕：第2場ではジークフリートが鳥の声に耳を澄ます「森のささやき」、大蛇となった巨人ファフナーを倒して指環を手に入れる「ジークフリートの戦い」が続く。

神々の黄昏より▶

第3夜『神々の黄昏』（原曲は約4時間半）ではヴォータンとアルベリヒの子孫が指環を奪い合うのだが、もはやアルベリヒの命令は無視され、ヴォータンに至っては指環を手にすることを諦めて姿も現さない。ジークフリートとブリュンヒルデの愛が密かに描かれる「夜明け」から、ジークフリートが新たな旅へ出発してライン川を下っていく「ジークフリートのラインの旅」までを描く序幕で始まり、ギービヒ家のハーゲン（アルベリヒの息子）が角笛を吹いて家臣たちを召集する第2幕：第3場、ラインの乙女から指環が呪われていると警告されるも、ジークフリートが返却を拒否する第3幕：前奏曲と第1場、ジークフリートがハーゲンに殺される第3幕：第2場では「ジークフリートの葬送行進曲」が続いていく。第3幕：第3場では、ブリュンヒルデが投げ込んだ松明によりヴァルハラが炎に包まれて神々の世界が終焉を迎え、指環はライン川の水底に再び眠る。最後に鳴り響くメロディは、かつてジークリンデが歌った「救済のライトモチーフ」だ。

【楽器編成】フルート3（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン8（ワーグナーチューバ4持替）、[バンダ：ホルン]、トランペット3、バストランペット、トロンボーン4（コントラバストロンボーン持替）、チューバ、ティンパニ2、グロッケンシュピール、トライアングル、シンバル、タムタム、小太鼓、アンヴィル、ハープ2、弦楽5部。

Passion for the Best

その情熱が、可能性をひらく。

限界を超えて、ベストをひたむきに追い求める。

大和証券グループは、挑み続ける情熱を失わない、すべての人を応援します。

大和証券グループ

SUMIDA
TOBIRA of classic
2026-2027 Season
#44

11.13[金] 14[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第44回

2026年11月13日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール

11月14日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

〈東欧〉

●リスト (1811-86)

ハンガリー狂詩曲第2番 (管弦楽版)

Franz Liszt: Hungarian Rhapsody No. 2 (orchestra version)

約10分

●リスト

ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調 *

Franz Liszt: Piano Concerto No. 1 in E-flat major *

約20分

I. Allegro maestoso. Tempo giusto

II. Quasi adagio

III. Allegretto vivace

IV. Allegro marziale animato

—— 休憩20分 ——

●ドヴォルジャーク (1841-1904)

交響曲第8番 ト長調 op. 88

Antonín Dvořák: Symphony No. 8 in G major, op. 88

約40分

I. Allegro con brio

II. Adagio

III. Allegretto grazioso – Molto vivace

IV. Allegro, ma non troppo

[指揮] ジュリアン・ラクリン

Julian Rachlin, Conductor

[ピアノ] 石井琢磨 *

Takuma Ishii, Piano *

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

演奏会アンケートは
こちらから

<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



文部省



チェコ共和国大使館

チェコセンター
東京



EMBASSY OF HUNGARY
TOKYO

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団)
- 特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援：チェコ共和国大使館 / チェコセンター東京
ハンガリー大使館 / リスト・ハンガリー文化センター

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

Profile



©K. Miura

ジュリアン・ラクリン [指揮] Julian Rachlin, Conductor

リトアニア生まれ。3歳よりウィーンで育ち、ボリス・クシュニール、ピンカス・ズーカーマンにヴァイオリンを、マリス・ヤンソンス、ソフィー・ラクリン、ダニエレ・ガッティに指揮を師事。14歳でムーティ指揮のウィーン・フィルと共演し、同楽団史上最年少ソリストとしてデビュー。以来約40年にわたり、卓越した技巧と豊かな音楽性を兼ね備えたヴァイオリニストとして聴衆を魅了するとともに、ヴィオラ奏者、指揮者としても高い評価を築いてきた。ソリストとしてはコンセルトヘボウ管、シカゴ響、バイエルン放送響など世界最高峰の楽団と共演。ヤンソンス、マゼールをはじめ、マケラ、メータ、ノセダら世界的指揮者との共演を重ねている。近年は指揮活動にも力を注ぎ、ヨーロッパ室内管やシカゴ響、スカラ座フィル、イスラエル・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管、ウィーン響など、世界有数の楽団へ客演を重ねている。現在はエルサレム交響楽団音楽監督、クリスチャンサン交響楽団首席指揮者を務めており、2026年には山形交響楽団のミュージックパートナーに就任。



石井琢磨 [ピアノ] Takuma Ishii, Piano

東京藝術大学を経てウィーン国立音楽大学ピアノ科に入学、同大学修士課程を満場一致の最優秀で卒業。ポストグラデュアールコース修了。2016年ジョルジュ・エネスク国際コンクール(ルーマニア・ブカレスト)ピアノ部門第2位受賞。“TAKU-音 TV たくおん”YouTubeチャンネル総再生回数は1億回を超え、チャンネル登録者数も34万人突破。サントリーホール大ホール公演が発売3分で完売。24年、25年と全国ツアーでは総動員数1万人を動員。25年6月満席のベルリン・フィルハーモニーにて日本人ソリストとして大成功を収め、一躍世界的脚光を浴びる。26年石井琢磨プロデュースの4台のピアノを使用して男性ピアニスト8人16手で奏でるピアノプロジェクト「PIANO CLOVER」略して「ピアクロ」が始動。古き良きクラシック音楽に主軸を置きながら、「クラシックをより身近に」がコンセプトのピアニスト。

Program Notes ●石川亮子 [音楽学]

「で、バスで何時間？」もう随分前、ウィーンに留学した頃、各国から集まった学生同士の会話は決まってこの質問になった。プラハまで約5時間。ブダペストまで約4時間。パリまで約20時間。イスタンブールまで一日と約12時間。東京から来た私にも、同じ質問が必ず飛んできた。「バスでは行けないんだよ。間に大きな海があるからね」と答えても、「そうなんだ。で、バスで何時間？」と聞かれる。彼ら・彼女らの距離感は「バスで何時間」で出来上がっているのであった。

本日の演奏会のテーマは、東欧(ハンガリー／チェコ)である。確かに政治的な意味では、オーストリアは西側の東の果てで、ハンガリーやチェコは東側に位置した時代もあった。しかし地続きのヨーロッパでは、国境線が歴史のなかで幾度も動いてきた。そしてオーストリア、ハンガリー、チェコはいずれも「中欧 Mitteleuropa」という文化圏のなかで捉えることができる。「メリー・ウィドウ」でウィンナ・オペレッタ史上最大の当たりをとったレハールは、ハンガリー語を第一言語として育った。『変身』で知られるカフカは、プラハ生まれのユダヤ系ドイツ語作家である。多言語・多文化が交差する「中欧」が、こうした豊かな芸術を育む土壌となっているのである。

■ リスト：ハンガリー狂詩曲第2番(管弦楽版)

自らの祖国として ▶ フランツ・リスト(1811～86)は現在のオーストリア・ブルゲンラント州ライディンゲンで生まれた。ライディンゲンは当時、ハプスブルク家の支配下にあるハンガリー王国に属しており、リストはドイツ語を日常語とする家庭に育ちながら、生涯にわたってハンガリーを自らの祖国として意識していた。その思いは、ハンガリーに題材を求めた作品の数々に結実している。本日の演奏はミュラー＝ベルクハウス編曲版による。

作曲の経緯と特徴 ▶ 「ハンガリー狂詩曲」の大半は、ワイマール時代(1848～61年。ヴィルトゥオーゾ・ピアニストの生活に別れを告げ、ワイマール宮廷楽長となり、交響詩を創始するなど作曲家として充実の時を過ごした)に完成された。第2番は1847年に作曲され、1851年に出版されている。ロマン派において「ハンガリー風」と銘打たれた音楽の多くがそうであったように、リストにとってハンガリー音楽はロマの音楽と重ねられて理解されていた。第2番もまた、8小節の序奏に続いて、ラッサン(ラッシュー。遅いテンポの哀愁に満ちた前半部)とフリスカ(フリッシュ。激しく躍動的な後半部)からなる。

[楽器編成] フルート2(ピッコロ2持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ 弦楽5部。

■ リスト：ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調

ピアノ曲に編曲して
広める

ロマン派におけるリストの最大の功績の一つに、「作曲家兼ピアニスト」として、他の作曲家の作品をピアノ曲へと編曲し、自ら広く演奏したことがある。録音や放送のなかった当時、音楽を聴く機会は生演奏に限られていた。ベートーヴェンの交響曲やワーグナーのオペラ、そしてベルリオーズの「幻想交響曲」など、リストが原曲の魅力をピアノで伝えたことは、これらの作品のレパートリー定着に大きな役割を果たした。

自らのプロデュースにより

ピアノ協奏曲第1番は1855年2月17日、ベルリオーズの指揮、リスト自身のピアノで初演された。この演奏会も、ワイマールの宮廷楽長だったリストが、「ベルリオーズ週間」の一環としてプロデュースしたものである。しかし作品の成立はずっと以前、1832年のスケッチまでさかのぼることができる。1835年に3楽章の協奏曲として一度完成されたものの、その後も改訂が重ねられた。初版は1857年に出版され、最初の着想から約25年をかけて最終稿へと至ったことになる。

構成(単一楽章)と
音楽の特徴

冒頭の華々しいピアノ独奏に聴かれるように、本作はヴィルトゥオーゾのための協奏曲であると同時に、単一楽章のなかに4楽章からなるソナタの原理が融合された、きわめて斬新な作品となっている。切れ目なく演奏されるが、便宜上、4楽章に分けて述べると、全体はソナタ・アレグロ楽章、緩徐楽章、スケルツォ楽章、フィナーレ楽章に相当する。第1楽章が変ホ長調、第2楽章がロ長調となるのは、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」と同じであることに注目したい。慣例的に3楽章構成である協奏曲にスケルツォ楽章が入っているのは、この協奏曲の献呈者であるピアニスト、作曲家のアンリ・リトルフの影響と考えられている。行進曲風の第4楽章では最後に冒頭の音楽が回想され、華やかに締めくくられる。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、シンバル、トライアングル、弦楽5部。

■ ドヴォルジャーク：交響曲第8番 ト長調 op. 88

苦学を経て作曲家に

アントニン・ドヴォルジャーク(1841~1904)は現在のチェコ、ボヘミア地方のネラホゼヴェスで生まれた。ネラホゼヴェスは当時、ハプスブルク帝国の統治下にあり、ドイツ語でミュールハウゼン・アン・デア・モルダウと呼ばれていた。家業の肉屋兼宿屋を継ぐことを期待されながらも、苦学してドイツ語と音楽を学び、しばらくはヴィオラ奏者として生計を立

てたドヴォルジャーク。その才能をブラームスに認められ、1878年の「スラヴ舞曲」第1集が成功したことで、ようやく作曲家としての地位を確かなものにした。

「田園」シンフォニー
完成の背景

9曲を数えるドヴォルジャークの交響曲のなかでも第8番は、第9番「新世界より」と並んで最も重要な作品の一つとされる。1884年、プラハの南西約50キロのヴィソカーに別荘を購入したドヴォルジャークは、アメリカ滞在(1892~95年)中を除き、毎夏をこの地で過ごした。早朝の森を散歩し、ガーデニングを楽しみ、飼っている鳩の世話をするなど、豊かな自然を満喫しながら創作に励んだのである。第8番は1889年8月26日にヴィソカーで作曲が始められ、同年11月8日にプラハで完成された。わずか2ヶ月余りで書き上げられた本作は、ボヘミアの美しい自然のなかで生まれた、ドヴォルジャークの「田園」と呼ぶにふさわしい交響曲と言えるだろう。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章は哀愁たっぷりのト短調の序奏から始まる。同じテンポのまま主部に入り、フルートによって明るいト長調の第1主題が提示される。木管楽器による第2主題は、定石に従えばニ長調であるがロ短調となる。その他にも魅力的なメロディーが次々と現れる、のびやかで生命力にあふれた楽章で、ドラマティックな展開部では、その頂点で序奏が回帰し、そのまま再現部へと進んでいく。

第2楽章は、構成としてはロンドを思わせる変化に富んだ緩徐楽章。対照的な表情を持つ音楽が入れ替わりながら展開される一方で、カッコウを思わせる動機など、よく聴くと各旋律は「4度」を核としていることが分かる。

第3楽章はスラヴ舞曲風の憂いを帯びた優雅で美しい音楽で、しばしば独立したアンコール・ピースとしても演奏される。中間のトリオの旋律は、15年前に書かれたドヴォルジャークの1幕の喜歌劇「頑固な恋人たち」から、主役トニークの歌うアリアに由来している。

第4楽章はトランペットのファンファーレによって祝祭的に幕を開ける。主部は変奏曲となるが、そこにソナタ形式的要素も重ねられている。変奏主題はト長調の主和音(ソ・シ・レ)から始まり、穏やかで抒情的な場面あり、躍動的な舞曲あり、勇壮な行進曲ありと、音楽は緩急を織り交ぜながら進み、最後は圧倒的なコーダとともに熱狂のうちに終わる。

[楽器編成]フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。